

2013 年度  
関西福祉科学大学大学院  
社会福祉学研究科  
心理臨床学専攻

修士論文題目

父親の育児家事行動に対する母親の思い

指導教員（ 谷向 みつえ ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 21261005 氏名 廣友昭洋

## 目次

第1章 序論	1
第2章 研究Ⅰ 方法	5
第3章 研究Ⅰ 結果	7
第4章 研究Ⅰ 考察	14
第5章 研究Ⅱ 方法	16
第6章 研究Ⅱ 結果	18
第7章 研究Ⅱ 考察	28
第8章 本研究のまとめと今後の課題	32
第9章 引用文献	34

## 第 1 章 序論

今、日本では世界でも類を見ない急速なスピードで少子化が進み、生涯未婚率が上昇している。柏木・大野・平山(2010)は「結婚して新たな家族を創り、子どもを産み育てること」に積極的になれないのは、それが必ずしも喜びと期待を持てる営みではないからであり、従来の＜家族＞のあり方が、現代の私たちにとってしっくりこないものになっているからではないかと述べている。

これを裏付ける資料として、内閣府が発表する「平成24年版子ども・子育て白書」では、週60時間以上の長時間労働をしている男性は、どの年代においても、2005（平成17）年以降減少傾向にある。しかしながら、子育て期にある30代男性は、約5人に1人が週60時間以上の就業となっており、ほかの年代に比べ最も高い水準となっている。加えて、育児時間を国際比較した、6歳未満の子どもを持つ父親の育児時間は、1日平均約30分程度しかなく、欧米諸国と比較して半分程度となっている。家事の時間を加えても、我が国の子育て期の父親の家事・育児にかかる時間は1日平均1時間程度であり、欧米諸国と比べて3分の1程度と、男性の育児参加が進んでいないことが分かる。

また、厚生労働省(2012)が発表する「平成23年度雇用均等基本調査」では、育児休業利用制度の利用状況において、女性は87.8%と平成22年度調査の84.3%より3.5ポイント上昇した。また、男性は2.63%で前回調査（1.34%）より1.29ポイント上昇した。このことから出産を機に一旦仕事を休み、育児家事に専念し養育を行う女性がほとんどである。一方、男性は育児休暇を取得せず、育児家事を母親に任せ仕事に専念するという考えが主流であることがわかる。このように子どもが誕生しても、育児家事の負担を母親が抱えているという現状がある。

さらに父親の育児時間の少なさが、子どもの数や母親の就業継続率など、子育てを取り巻く状況と関連している先行研究もある。

国立社会保障・人口問題研究所（2010）が発表する「第14回出生動向基本調査」では、子ども数についての考え方において、理想の子ども数を持たない理由、予定の子ども数を実現できない理由として最も多いのは「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」であった。とりわけ30歳未満の若い世代ではこうした経済的理由を選択する割合が高い。一方、30歳以上では、「欲しいけれどもできないから」などの年齢・身体的理由の選択率が高い。また、30歳代では「これ以上、育児の心理的・肉体的負担に耐えられないから」という回答がほかの年齢層に比べて多かった。これら経済的理由、年齢・身体的理由、育児負担の他に、夫に関する理由として、夫の家事・育児への協力が得られないからという理由も10.9%の割合で理想の子どもを持たない理由に入っていた。

また、福丸（2003）は父親のかかわりについての研究において、仕事観、子ども観の父母比較を行っている。このうち、子ども観では「制約・負担」「充実・

楽しみ」で、母親のほうが尺度得点が有意に高く、母親が子どもを育てるのは大変だが一方で充実感も感じるという両面的な感情を持っているということが示された。上記の調査結果から現代の家庭において、子どもを産み育てるということは、母親にとって心の支えになったり日々の生活を豊かにするものであると示唆されるが、一方で家庭内に多くの金銭的・時間的・精神的・肉体的な負担がかかっているということがわかる。

国立社会保障・人口問題研究所（2011）が発表する「2008年社会保障・人口問題基本調査」では、夫の育児遂行と妻の就業および子ども数において、第1子出産を機に妻が仕事を継続するよりも退職ケースのほうが依然多いが、全体としてみると比較的夫が育児に関与している育児得点の高い層で仕事を継続した割合が高く、育児にあまり関与しない育児得点の低い層で退職する割合が高いことが明らかにされている。これは結婚持続期間の長短にかかわらず同じ傾向を示している。これは夫の育児遂行割合が高いと妻の育児の肉体的負担が減り、肉体的負担が減少した分だけ妻が就業しやすくなると考えられる。また、夫婦両者が働くことによって経済的負担も軽減する可能性が考えられる。

2007年に策定された「ワーク・ライフ・バランス」という課題が社会的に重要視されるようになり、現在政府、自治体、労働組合、企業の各方面において、①就労による経済的自立が可能な社会②健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会③多様な働き方・生き方が選択できる社会を目指すための取り組みが進められている。取り組むに際しては、すべての働く人びとがやりがいのある「仕事」と充実した「生活」を両立できるように、どのような制度を構築し、それをいかに実現していくかということが焦点となる。しかし、日本の現状は、あらゆる働く人びとの「ワーク・ライフ・バランス」の達成にはほど遠いのが実情である。

この様な社会情勢を背景に、次に父親の育児時間が母親の育児意識や育児ストレス、夫婦関係や子どもの発達にどのような影響をもたらしているのかを検討した研究がある。

まず母親の育児意識に関して、平山（2002）は夫の家事・育児参加の低さや妻への情緒的サポートの低さが、妻たちの育児不安や育児ストレスなどネガティブな心理状態につながることを明らかにした。他にも、母親・妻が「子育ての責任を持っていない」と感じることで育児不安につながる（牧野,1982）、夫との会話の時間が短く、夫と話をしているときに充実感・幸福感を感じることができない場合に育児不安は強まること（牧野,1983）、実際、夫が育児に積極的に参加することが、妻・母親の育児不安を大きく低減させること（柏木・若松,1994）、夫の育児への参加・協力は、母親の精神的安定だけでなく、母親の養育態度や具体的育児参加の内容などすべてにわたり好ましい影響を与えていること（服部・原田,1990）などが明らかにされている。また、夫が妻に対して積極的に関心・愛情を示す（ケアする）ほど、妻の家族生活への不満感・否定感は低下し、育児への肯定感は強まることも示されている（平山,1999）。と

のことであった。

夫婦関係について、徳田・水野（2001）の父親の家事協力・育児参加と夫婦げんかの関係を調査した研究では父親の育児協力が少ないと感じている家庭、母親が育児の負担が大きいと考えている家庭の方が夫婦げんかをよくする傾向にあること、夫婦間のコミュニケーションがうまく取れている家庭、父親が母親の話を聞こうとする家庭では夫婦げんかをする割合が低い、父親が母親の話を聞こうとしない家庭では夫婦げんかをする割合が高いことを明らかにした。また、数井・無藤・園田（1996）の家族システムの視点から子どもの発達と母子関係・夫婦関係を調査した研究では、夫婦関係の調和性、親ストレス、夫婦関係の調和性と親ストレスの交互作用の3つの説明変数すべてが、基準変数である子の愛着の安定性と有意な関係にあることが明らかにされている。

従来の研究では家庭内において夫の育児参加や妻へのサポートが妻の育児不安や家族生活への不満、夫婦げんかなどの精神的負担の軽減に繋がることが明らかにされている。また親ストレスが軽減することで、子の愛着の安定が増すことも明らかにされている。

三上・掛谷（2011）の母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究で、父親の育児参加や精神的支えに満足していない母親は、育児ストレスが高い傾向にあることを明らかにしている。このことから現代の家庭において母親の精神的負担を軽減するためには、父親の育児参加が必要な要素であることがわかる。

以上の研究から父親が家事・育児に参加することによって母親の精神的・肉体的負担が軽減され子どもを出産したり育児がしやすくなると考えられる。そして母親も就労に取り組みやすくなり金銭的負担も軽減されると考えられる。また、夫婦関係のみならず、子への愛着の安定が増すなど、家族にとって好ましい効果があることが示唆されている。では、父親の育児参加を促す要因として何が考えられるのであろうか。

小西（2004）は、乳児を持つ父親の育児参加に関する関連要因と指導のニーズを明らかにすることを目的として調査をした。その結果、父親の育児参加意欲には「労働条件や疲労度」「夫婦のコミュニケーション」が関連していること、また、実際の育児参加には「自己の父親の育児」「家族形態」が関係していることが示唆された。

福丸・無藤・飯長（1999）は、乳幼児期を持つ父親と母親という立場の違いによる比較や夫婦単位の分析を行ったうえで、それらと実際の親行動である育児参加との関連について検討をした。その結果、父親の育児参加との関連において、父親自身の「仕事中心」の仕事観や「無関心・低価値」の子ども観、夫婦関係の調和性が関連していることを明らかにした。このことから父親の養育参加には労働や夫婦関係、実際の育児には仕事への価値観や子どもへの関心・価値観が関係していることが分かる。

「父親の家事・育児の参加」が母親の肉体的・精神的負担を軽減させること

や、「父親の家事・育児の参加」を増加させる要因についても明らかにされている。しかし、実際の家庭内において父親はただ育児・家事に参加していれば良いだけなのであろうか。

田中(2010)は、父親の育児家事行動と夫婦関係満足度に着目し、出産後早期と産後 6 か月の比較により、6 か月の母親の育児ストレスと夫婦の要因との関連について検討した。その結果、6 か月の母親の育児ストレスと 6 か月時点の夫婦関係要因との関連において、①父親が自己評価する諸要因は、直接的には母親の育児ストレスと関係していなかったこと、②母親の評価要因で、母親の育児ストレスに有意に関連していたのは、「父親の育児家事行動に対する母親の満足度」だけであったこと、③母親の評価要因である「母親の評価した父親の育児家事行動」に関連していたのは父親の自己評価要因の「夫からみた夫婦関係満足度」、「父親の性役割分担意識」と、母親の評価要因の「父親の育児家事行動に対する母親の満足度」であったということを明らかにした。

このことから父親の育児家事行動と夫婦関係満足度との関連性や、母親の育児ストレスの軽減には実際の父親の育児家事行動ではなく母親が父親の育児家事行動を好意的に受け止め満足感を持つことが必要であることが明らかにされた。

#### 本研究の目的

ストレスとは、物理的・精神的な刺激（ストレッサー）によって引き起こされる生体機能のひずみ。また、それに対する生体の防衛反応。一般には、ストレッサーとなる精神的・肉体的な負担をいう（明鏡国語辞典,2002）。と定義されている。育児ストレスとは育児にのみ関してだけではなく、田中（2010）の研究でも明らかなように母親側の要因も関係していると考えられる。育児ストレスを研究する上で、現代の母親が育児のみではなくどのような精神的緊張や負担を抱えているかを知ることは必要なことであると考えられる。

本研究では、研究Ⅰとして、0 カ月~24 カ月の子どもを持つ母親に対して質問紙調査を実施し、育児ストレスと関連する母親の要因をより詳しく明らかにすることにより、母親の育児ストレスを軽減させるための方策を検討するために、母親の育児ストレスに影響を及ぼす要因を検討すること、そのメカニズムを解明する。また、研究Ⅱとして、インタビュー調査を実施し、母親が評価している父親像や育児・家事への不安を具体的に明らかにし、母親のニーズを理解することで母親や父親の育児支援に役立つ方略を検討する。

## 第 2 章 研究 I 方法

### 1. 調査対象

近畿地方の保育園 1 園、子育て広場 1 ヶ所、保健センター 2 ヶ所（4 カ月健診・1 歳半健診）、その他紹介により 0 カ月～24 カ月の子どもを持つ調査協力に同意が得られた母親を対象に質問紙調査を行った。

協力者総数は 162 名であった。162 名のうち、フェースシートの記入漏れ、または同一の尺度内に欠損値が 3 つ以上あった 35 名を除いた 127 名のデータを使用した。有効回答率 78.4%であった。

母親の平均年齢は 32.0 歳（SD=5.09, 範囲 20-46 歳, 最頻値 29 歳）、子どもの平均年齢は 9.6 カ月（SD=6.52, 範囲 2-24 カ月, 最頻値 4 カ月）、家族形態は核家族が 119 世帯（93.7%）、拡大家族（三世帯同居）もしくは複合家族（核家族や拡大家族に別の大人（子から見た叔父、伯母など）が同居）が 8 世帯（6.2%）、家族以外で子育てを助けてくれる社会的資源があると答えた母親は 106 名（83.4%）、家族以外で子育てを助けてくれる社会的資源がないと答えた母親は 21 名（16.5%）であった。なお調査期間は 2013 年 6 月～11 月であった。

### 2. 調査内容

「子育て期における父親の育児・家事行動に対する母親の思い」と題して、以下のような内容の調査を行った。

- 1) 父親の家事育児行動：鎌田・糸魚川・南・金澤・日野林・安田・橘・島田・江田・藤村(2000)が作成した育児家事協力尺度を使用した。父親の家事・育児行動に関して母親に記入を求めた。家事行動項目、育児行動項目の 11 項目から構成されている。回答は「いつもしている(1 点)」～「全くしない(4 点)」までの 4 段階で求め得点化した。
- 2) 父親の育児家事行動に対する満足度：母親に対し、父親の行っている育児・家事行動に対する満足度を調査するため、「夫はよく育児をしてくれている」、「夫のしてくれている育児には満足している」、「夫は育児を全く手伝ってくれないので不満である」など 6 項目を作成し、「あてはまる(1 点)」～「あてはまらない(4 点)」までの 4 段階で回答を求め得点化した。
- 3) 育児ストレス尺度：佐藤・菅原・戸田・島・北村 (1994)の育児ストレス尺度を用いた。生後 6 ヶ月児をもつ母親用の尺度で 22 項目 2 下位尺度から構成され、信頼性が検証されている。「非常に悩んでいる(4 点)」～「全く悩んでいない(1 点)」までの 4 段階で回答を求め得点化する。本研究では 24 カ月までの子どもを持つ母親を対象としているため、「離乳がすすまない」という項目を「離乳がすすまない・食が細い」に変更し、実施した。
- 4) 平等主義的性役割態度スケール短縮版：鈴木 (1994)の平等主義的性役割態度スケール短縮版は結婚・男女観、教育観、職業観の 3 つの領域から構成

されている。「全くその通りだと思う(5点)」～「ぜんぜんそう思わない(1点)」までの4段階で回答を求め得点化した。

- 5)主観的幸福感尺度：伊東・相良・池田・川浦(2003)が作成した、主観的幸福感尺度のうち、宗教観があまり根づいていない日本において実施することは不適當であると考えたため、満足感、自信、達成感、人生に対する失望感、至福感の4下位尺度のうち至福感因子である、「自分がまわりの環境と一体化していて、欠かせない一部である」という所属感を感じることがありますか」、「非常に強い幸福感を感じる瞬間がありますか」、「自分が人類という大きな家族の一員だということに喜びを感じることがありますか」という3項目を除外した12項目を「全くそう思わない(1点)」～「非常に(4点)」までの4段階で回答を求め得点化した。
- 6)母親であることの満足感尺度：「1~10点のうち、あなたは母親として、どの程度満足していますか？」という項目を作成し、「1(低)」～「10(高)」までの10段階で回答を求め得点化した。
- 7)父親への満足度：「父親として、現在の夫に点数をつけるとしたら何点ですか？」という項目に「1(低)」～「10(高)」までの10段階で回答を求め得点化した。
- 8)夫婦関係満足度尺度：諸井(1996)が作成した、夫婦関係満足度尺度の6項目を「かなりあてはまる(4点)」～「ほとんどあてはまらない(1点)」までの4段階で回答を求め得点化した。
- 9)被験者の特性：母親の年齢、家族構成、子どもの年齢、子育てを助けてくれる社会的資源の有無を尋ねた。

### 3. 倫理的配慮

質問紙に調査依頼文を記載し、回答は強制ではないこと、分析は統計的に処理されること、個人情報取り扱いについて等を明記した。本研究は、関西福祉科学大学倫理委員会の承認を得ている。



### 第 3 章 研究 I 結果

#### 1. 心理的要因となる構成概念の検討

「父親の育児家事行動」は、父親の育児得点合計と父親の家事得点合計から構成され、父親の育児得点合計は父親の育児全般得点と正の相関( $r=.744, p<.01$ )がみられた。また、父親の家事項目得点合計は同尺度内の父親の家事全般項目得点と正の相関( $r=.833, p<.01$ )が見られた。そのため本研究では「父親の育児家事行動」を「父親の育児全般」と「父親の家事全般」に分類をして使用する。

「平等主義的性役割態度スケール短縮版」の下位因子を検討するため、因子分析を行った。その結果、解釈可能性から 2 因子を抽出した。結果を表 1 に示す。第 I 因子は「主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない。」、「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である。」、「女性は家事や育児をしなければならないから、あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい。」といった項目に負荷量が高く、日本において伝統的な性役割意識であることから「女性の伝統的性思考」と命名した。第 II 因子は「女性はこどもが生まれても、仕事を続けたほうがよい。」、「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をする 것도それと同じくらい重要である。」、「家事は男女の共同作業となるべきである。」といった項目に負荷量が高く、家庭よりも仕事を重要視した考えであることから「女性の仕事思考」と命名した。アルファ係数は、第 I 因子が .870、第 II 因子が .677 で内的一貫性を有していると考えられる範囲の数値であった。

本研究において被験者に実施した「父親の育児家事行動」、「父親の育児家事行動に対する満足度」、「育児ストレス尺度」、「平等主義的性役割態度スケール短縮版」、「主観的幸福感」、「母親であることの満足感尺度」、「父親への満足度」、「夫婦関係満足度」は以後、心理的要因と定義する。

表1 平等主義的性役割態度スケール短縮版の因子分析の結果（バリマ

項目内容	I	II
5. 主婦が仕事を持つと、家族の負担が重く でよくない。	.790	.202
4. 女性の居るべき場所は家庭であり、男性 べき場所は職場である。	.753	.321
15. 女性は家事や育児をしなければならな あまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほ うがよい。	.737	.111
3. 主婦が働くとき夫をないがしろにしがちで 関係にひびがはいりやすい。	.698	.093
11. 女性は家事や育児をしなければならな フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほう がよい。	.624	.319
1. 女性が社会的地位や賃金の高い職業を持 婚するのが難しくなるから、そういう職業を持た ないほうがよい。	.572	.069
10. 娘は将来主婦に、息子は職業人になる 定して育てるべきである。	.550	.232
14. 経済的に不自由でなければ、女性は働 もよい。	.491	.115
2. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである。	.483	.065
9. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育 とが非常に大切である。	.441	.180
8. 子育ては女性にとって一番大切なキャリ る。	.410	-.118
13. 女性はこどもが生まれても、仕事を続 がよい。	.048	.649
12. 女性の人生において、妻であり母であ 大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重 要である。	.038	.640
7. 家事は男女の共同作業となるべきである。	.152	.606
6. 結婚後、妻が必ずしも夫の姓を名乗る必 く、旧姓で通してもよい。	.202	.479
寄与率	27.6	12.1

## 2. 被験者の特性別、心理的要因の差の検定

本研究で実施した質問紙の被験者全体の平均と標準偏差を表2、表3に示す。

母親の年齢を平均年齢の $\pm 1SD$ で3群に分けた。低群では20~27歳、中群では28~36歳、高群では37~45歳と定めた。母親の年齢と心理的要因の平均値の差の結果を表4に示す。また、家族形態（核家族か拡大家族か）、子どもの年齢（0~5ヶ月と6~24ヶ月）、子どもの出生順位（第一子かそうでないか）、社会的資源の有無について心理的要因の各尺度の平均得点がこれらの群間で異なるかを検討した。家族形態（核家族か拡大家族か）、子どもの年齢（0~5ヶ月と6~24ヶ月）、子どもの出生順位（第一子かそうでないか）、社会的資源の有無による群間の各心理的要因得点の差を検定した結果をそ

れぞれ表 5、表 6、表 7、表 8 に示す。

家族形態、子どもの年齢、子どもの出生順位、社会的資源の有無と心理的要因の各尺度の  $t$  検定を行った結果、子どもの年齢（0～5 ヶ月と 6～24 ヶ月）と母親としての満足度得点(表 6, $t(123)=2.73, p<.01$ )、社会的資源の有無と主観的幸福感(表 8, $t(124)=2.00, p<.05$ )に有意な差異が見られた。そして、家族形態（表 5,核家族か拡大家族か）、子どもの出生順位（表 7,第一子かそうでないか）と心理的要因の各尺度得点には有意な差異が見られなかった。また、母親の年齢の各群（3 水準）で各心理的要因について 1 要因分散分析を行った結果、有意な差異が見られなかった（表 4）。

表 2 被験者の特性

	平均値	SD
育児ストレス	34.12	8.84
育児家事満足度	14.31	2.20
父親の得点	7.72	1.91
母親としての満足度	6.67	1.97
夫の家事全般	2.39	0.88
夫の育児全般	2.97	0.67
主観的幸福感	37.14	3.99
夫婦関係満足度	19.04	3.46
平等主義的性役割態度	51.72	9.26

表 3 被験者の特性（下位尺度）

	平均値	SD
育児ストレス（子ども関連）	18.67	5.66
育児ストレス（母親関連）	15.38	4.28
主観的幸福感（自信）	9.19	1.48
主観的幸福感（達成感）	8.69	1.42
主観的幸福感（失望感）	5.97	1.55
女性の伝統的性思考	38.40	7.89
女性の仕事思考	13.32	2.89

表 4 母親の年齢と心理的要因の平均値の差

	母親年齢低群(20～27歳)		母親年齢中群(28～36歳)		母親年齢高群(37～45歳)		F
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
育児ストレス	34.36	10.32	33.70	7.98	34.96	9.72	.21
育児家事満足度	14.48	2.16	14.35	2.18	14.07	2.34	.26
父親の得点	7.32	1.86	7.88	1.62	7.66	2.53	.81
母親としての満足度	6.46	1.53	6.82	1.89	6.48	2.49	.47
夫の家事全般	2.44	1.08	2.42	0.80	2.28	0.92	.33
夫の育児全般	2.96	.68	3.01	0.63	2.86	0.74	.54
主観的幸福感	36.08	3.52	37.31	3.91	37.66	4.51	1.19
夫婦関係満足度	19.08	3.57	19.32	2.96	18.29	4.44	.90
平等主義的性役割態度	50.40	9.73	52.33	8.62	51.34	10.51	.43

表 5 家族形態と心理的要因の平均の差

	核家族群		拡大家族群		F	t
	平均値	SD	平均値	SD		
育児ストレス	33.88	8.56	37.63	12.34	2.13	-1.16
育児家事満足度	14.30	2.19	14.50	2.56	0.59	-0.25
父親の得点	7.71	1.83	7.88	3.00	1.37	-0.24
母親としての満足度	6.74	1.91	5.63	2.72	1.47	1.56
夫の家事全般	2.40	0.89	2.25	0.89	0.01	0.47
夫の育児全般	2.97	0.67	2.88	0.64	0.09	0.41
主観的幸福感	37.21	4.02	36.13	3.68	0.05	0.74
夫婦関係満足度	19.03	3.25	19.13	6.08	5.22 *	-0.04
平等主義的性役割態度	51.34	9.13	57.50	9.77	0.15	-1.84

\*p &lt; .05

表 6 子どもの年齢と心理的要因の平均の差

	0～5ヵ月群		6～24ヵ月群		F	t
	平均値	SD	平均値	SD		
育児ストレス	34.16	8.91	34.09	8.85	.16	.042
育児家事満足度	14.15	2.24	14.45	2.17	.09	-.76
父親の得点	7.43	2.04	7.98	1.75	2.90	-1.66
母親としての満足度	6.18	2.13	7.12	1.72	3.85	-2.73 **
夫の家事全般	2.41	0.97	2.38	0.80	3.33	.20
夫の育児全般	2.97	0.71	2.97	0.63	.00	-.02
主観的幸福感	36.55	3.77	37.68	4.14	.00	-1.60
夫婦関係満足度	18.61	3.30	19.42	3.58	.35	-1.32
平等主義的性役割態度	51.57	9.19	51.86	9.39	.06	-.18

\*\*p &lt; .01

表 7 子どもの出生順位と心理的要因の平均の差

	第一子群		第一子でない群		F	t
	平均値	SD	平均値	SD		
育児ストレス	35.31	9.42	32.65	7.91	3.05	1.67
育児家事満足度	14.66	2.11	13.89	2.25	0.25	1.96
父親の得点	7.74	1.88	7.69	1.96	0.14	0.15
母親としての満足度	6.82	1.75	6.49	2.21	4.90 *	0.92
夫の家事全般	2.49	0.87	2.28	0.89	0.32	1.38
夫の育児全般	2.97	0.71	2.97	0.62	0.85	0.05
主観的幸福感	37.26	3.48	37.00	4.56	3.71	0.36
夫婦関係満足度	19.54	3.43	18.47	3.43	1.11	1.74
平等主義的性役割態度	52.12	9.08	51.26	9.52	0.84	0.52

\* $p < .05$ 

表 8 社会的資源の有無と心理的要因の平均の差

	社会的資源有群		社会的資源無群		F	t
	平均値	SD	平均値	SD		
育児ストレス	33.91	9.15	35.26	7.01	1.58	-.61
育児家事満足度	14.27	2.29	14.52	1.72	2.38	-.48
父親の得点	7.73	1.93	7.67	1.80	0.00	.13
母親としての満足度	6.77	1.96	6.15	2.01	0.00	1.29
夫の家事全般	2.36	0.92	2.57	0.68	3.97 *	-1.24
夫の育児全般	2.97	0.67	2.95	0.67	0.42	.12
主観的幸福感	37.46	3.94	35.57	3.97	0.21	2.00
夫婦関係満足度	18.97	3.49	19.38	3.37	0.21	-.49
平等主義的性役割態度	51.61	9.31	52.29	9.19	0.01	-.30

\* $p < .05$ 

### 3. 心理的要因間の関連の検討

次に育児ストレスと各尺度間の関係を検討するため相関分析を行った。表 9 は 9 つの尺度間の相関係数および有意水準を示したものである。育児ストレスは母親としての満足度と有意な負の相関関係 ( $r = -.325, p < .01$ ) があり、さらに主観的幸福感との間にも有意な負の相関関係 ( $r = -.445, p < .01$ ) があつた。育児ストレス以外で、比較的多くの相関が認められたものが父親の得点と夫婦関係満足度であつた。さらに詳しく育児ストレスとの関連を調べるために、育児ストレス、主観的幸福感を下位尺度に分けて相関分析を行った。表 10 は下位尺度に分けた尺度間の相関係数および有意水準(有意確率)を示したものである。育児ストレス(子ども関連)は育児ストレス(母親関連)と有意な正の相関関係 ( $r = .567, p < .01$ ) があつた。さらに主観的幸福感(失望感)との間にも有意な正の相関関係 ( $r = .320, p < .01$ ) があつた。育児ストレス(母親関連)は育児ストレス(子ども関連)以外に、主観的幸福感(失望感)と有意な正の相関関係

係 ( $r=.487, p<.01$ ) があった。さらに、母親としての満足度、主観的幸福感 (満足感)、主観的幸福感 (自信)、主観的幸福感 (達成感) と有意な負の相関関係 ( $r=-.395, p<.01$ ;  $r=-.304, p<.01$ ;  $r=-.332, p<.01$ ;  $r=-.281, p<.01$ ) があった。育児ストレスの子ども関連と母親関連以外で、比較的多くの相関関係が認められたものが父親の得点と主観的幸福感 (満足感) と主観的幸福感 (失望感) であった。

表 9 心理的要因間の関連

	育児家事満足度	父親の得点	母親としての満足度	夫の家事全般	夫の育児全般	主観的幸福感	夫婦関係満足度	平等主義的性役割態度
育児ストレス	.023	-.062	-.325**	.081	.129	-.445**	-.167	.149
育児家事満足度		.454**	.150	.581**	.433**	.191*	.349**	-.033
父親の得点			.405**	.387**	.499**	.308**	.537**	-.206*
母親としての満足度				.221*	.217*	.445**	.289**	-.174
夫の家事全般					.547**	.120	.148	.020
夫の育児全般						.176*	.256**	-.192*
主観的幸福感							.448**	-.100
夫婦関係満足度								-.192*

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

表 10 下位尺度を含む心理的要因間の関連

	育児ストレス (母親関連)	育児家事満足 度	父親の得点	母親としての 満足度	夫の家事全 般	夫の育児全 般	主観的幸福感 (満足感)	主観的幸福感 (自信)	主観的幸福感 (達成感)	主観的幸福感 (失望感)	夫婦関係満足 度	女性の伝統的 性思考	女性の仕事思 考
育児ストレス (子ども関連)	.567**	.035	-.060	-.207*	.048	.132	-.215*	-.110	-.208*	.320**	-.126	.083	.055
育児ストレス (母親関連)		-.011	-.062	-.395**	.091	.091	-.304**	-.332**	-.281**	.487**	-.183*	.146	.150
育児家事満足度			.454**	.150	.581**	.433**	.200*	.011	.240**	-.115	.349**	-.060	.059
父親の得点				.405**	.387**	.499**	.342**	.094	.205*	-.248**	.537**	-.179*	-.172
母親としての満足度					.221*	.217*	.353**	.265**	.184*	-.393**	.289**	-.134	-.194*
夫の家事全般						.547**	.124	-.003	.097	-.113	.148	.018	.015
夫の育児全般							.141	.095	.191*	-.070	.256**	-.197*	-.077
主観的幸福感 (満足感)								.216*	.294**	-.466**	.492**	-.125	-.229**
主観的幸福感 (自信)									.211*	-.290**	.138	.030	-.133
主観的幸福感 (達成感)										-.408**	.229*	-.055	.003
主観的幸福感 (失望感)											-.413**	.011	.199*
夫婦関係満足度												-.156	-.188*
女性の家庭志向													.332**

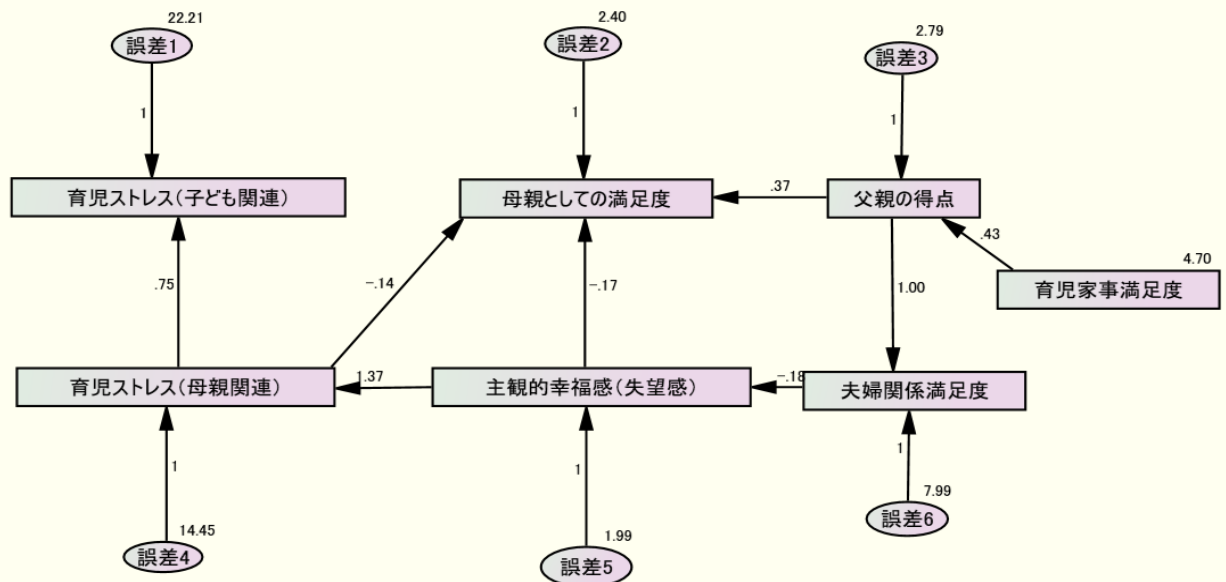
\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$

#### 4. 父親の育児家事行動が母親の育児ストレスに影響するプロセス

ここまでの分析で母親の育児ストレスは母親としての満足度と主観的幸福感と相関関係にあることが明らかにされた。田中 (2010)の研究とは異なり育児ストレスと父親の育児家事行動に対する母親の満足度とは相関関係が認められなかった。そこで本研究では、父親の育児家事行動が母親の育児ストレスに影響

するプロセスにおいて、その他の母親の心理的要因を媒介変数として影響しているということを仮定し、父親の育児・家事行動と母親の育児ストレス間の因果構造について探索的に共分散構造分析を行い明らかにした。その結果、「育児家事満足度」が「父親の得点」に影響をし、「父親の得点」が「母親としての満足度」と「夫婦関係満足度」に影響をし、「夫婦関係満足度」が「主観的幸福感（失望感）」に影響をし、「主観的幸福感（失望感）」が「育児ストレス（母親関連）」に影響をし、「育児ストレス（母親関連）」が「母親としての満足度」と「育児ストレス（子ども関連）」に影響をするというモデルが支持された。

モデルの適合度指標について、 $\chi^2(13,=117) = 3.78$ ,  $p=.99$ ,  $CFI=1.00$ ,  $RMSEA=.00$  と十分な値が示された。結果を図 1 に示す。



$$\chi^2(13,=117) = 3.78, p=.99, CFI=1.00, RMSEA=.00$$

図 1 父親の育児家事行動が母親の育児ストレスに影響するプロセス

## 第 4 章 研究 I 考察

研究 I の目的は育児ストレスと関連する母親の要因をより詳しく明らかにすることにより、母親の育児ストレスを軽減させるための方策を検討するために、母親の育児ストレスに影響を及ぼす要因を検討すること、そのメカニズムを解明することであった。本研究の結果から述べられることは以下の通りである。

### 1. 育児ストレスにおける母親の年齢別比較

母親の年齢を平均年齢の $\pm 1SD$ で 3 群に分け、各群（3 水準）の 1 要因分散分析を行った結果、育児ストレスに有意な差異は見られなかった。また、その他の育児家事満足度や父親の得点などの要因にも有意な差異は見られなかった。このことから、本研究では 20 歳から 45 歳と年齢に幅のある母親に調査を依頼したが、どの世代も性役割など母親の性質は変わらないということが考えられる。また、本研究では母親の肉体的負担については調査をしなかったが、加齢により、より育児の負担がかかるであろうと考えられる母親年齢高群の育児ストレスに有意な差異は見られなかったことから、母親の肉体的負担が育児ストレスに影響を与えるということは考えにくい。

### 2. 育児ストレスと母親の属性との関連

家族形態（核家族か拡大家族か）で母親の心理的要因について  $t$  検定を行った結果、育児ストレスに有意な差異は見られなかった。また、その他の心理的要因にも有意な結果は得られなかった。これは核家族に対し拡大家族の標本が少ないため、拡大家族の数をさらに集めれば異なる結果が得られるかもしれない。しかしながら本研究で得られた結果をもとに考えると、拡大家族群は育児ストレスの標準偏差の値が核家族群より大きいので、拡大家族群の育児ストレスの要因は今後検討する必要がある。

子どもの年齢（0~5 ヶ月と 6~24 ヶ月）の 2 群で母親の心理的要因について  $t$  検定を行った結果、育児ストレスに有意な差異は見られなかった。しかし母親としての満足度には 1%水準で有意に 6~24 ヶ月群の方が高かった。これは初めての子どもを持つ母親が育児に慣れてくる時期は 6.3 カ月という我部山（2002）の報告と関連し、育児初心者である 0~5 カ月の子どもを持つ母親と比べ、6~24 カ月の母親は育児に慣れることや、子どもが座るようになったり睡眠時間のリズムが整ってくることもあり発達が安定してくる時期にあると考えられるため生活に余裕が生まれ母親としての満足度が高まったと考えられる。

子どもの出生順位（第一子かそうでないか）の 2 群で母親の心理的要因について  $t$  検定を行った結果、育児ストレスに有意な差異は見られなかった。また、その他の心理的要因にも有意な差異は見られなかった。これは子ども



の数が増えると、母親の育児経験も増え、育児ストレスが減少すると考えられるが、しかし子どもの数が増えた分母親の育児の負担が増えるため育児ストレスに差がなかったと考えられる。

社会的資源の有無の 2 群で母親の心理的要因について  $t$  検定を行った結果、育児ストレスに有意な結果は得られなかった。しかし主観的幸福感には 5%水準で有意に社会的資源有群の方が高かった。これは子育てを手伝ってくれる人が身近にいることによって、母親の負担が減り、母親が自分自身のために使える時間が増えたため主観的幸福感が高まったと考えられる。

### 3. 育児ストレスと他の心理的要因間の関連

育児ストレスと各尺度間の関係を検討するため相関分析を行った結果、育児ストレスは母親としての満足度と主観的幸福感との間に 1%水準で有意な負の相関関係があった。田中 (2010)の研究と異なり育児ストレスと父親の育児家事行動に対する母親の満足度とは相関関係が認められなかったこと、そして育児ストレスと母親としての満足度、主観的幸福感との間に相関関係があったことから育児ストレスは母親側の要因と強く関連しているということが考えられる。

### 4. 父親の育児家事行動が母親の育児ストレスに影響を与えるプロセスについての検討

父親の育児・家事行動と母親の育児ストレス間の因果構造について探索的に共分散構造分析を行った結果、「育児家事満足度」が「父親の得点」に影響をし、「父親の得点」が「母親としての満足度」と「夫婦関係満足度」に影響をし、「夫婦関係満足度」が「主観的幸福感（失望感）」に影響をし、「主観的幸福感（失望感）」が「育児ストレス（母親関連）」に影響をし、「育児ストレス（母親関連）」が「母親としての満足度」と「育児ストレス（子ども関連）」に影響をするというモデルが支持された。この結果は、育児ストレスと父親の育児全般や父親の家事全般、育児家事満足度と相関関係がみられず、母親としての満足感や主観的幸福感と相関関係があったことから、母親の育児ストレスに直接的に影響を与えるのは、父親が実際に育児家事を行うかどうかではなく、母親の主観的幸福感への影響、つまり自分自身の人生や将来に対して失望感を抱くことが関係しているということが言える。父親の行う育児家事やそれに対しての満足度はあくまで父親への評価や夫婦関係の満足度を經由して、母親としての満足度や失望感へ影響を与える。このことは、育児家事に限らず何らかの支援を父親が母親に行うことで母親が母親として、そして自分自身らしく生きるために必要な余裕を父親は母親に提供していると考えられる。

## 第 5 章 研究Ⅱ 方法

### 1. 調査対象

近畿地方の保育園 1 園、子育て広場 1 ヶ所、保健センター 2 ヶ所（4 カ月健診・1 歳半健診）、その他紹介により 0 カ月～24 カ月の子どもを持つ調査協力に同意が得られた母親を対象に質問紙調査を行い、その内インタビューへの協力を得られた 15 名の協力者に 25 分程度の半構造化面接のインタビュー調査を行った。協力者の年齢は 25～36 歳（平均年齢 29.7 歳、SD=3.10）であった。

### 2. 調査内容

面接は、協力者を含む家族の年齢、家族構成、父親の職業、協力者の職歴、子育てを助けてくれる社会的資源の有無を半構造化面接で聞いた後に、下記のインタビューガイドに沿って、協力者の話の流れを尊重しながら実施した。

表 11 ガイド項目

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 育児家事をされていてなにか不安や不満なことはありますか。</li><li>② 育児家事をされていて苦労していることはありますか。</li><li>③ 育児家事をご主人と協力して行うには何が大切だと思いますか。</li><li>④ ご主人にしてもらったら楽になる育児家事はありますか。</li><li>⑤ 現在ご主人にしてもらっていて楽になったなとか、助かったなと感じるものは何かありますか。</li><li>⑥ 育児家事に関して、ご主人と気が合わないと思ったり、意見が衝突したことはありますか。</li><li>⑦ 育児家事を夫婦でするにあたって今のご主人の仕事に対して奥さまはどのように思いますか。</li><li>⑧ ご主人は奥さまのことをよく気遣ってくれますか。</li><li>⑨ ご主人は奥さまのことをよく理解してくれていると思っていますか（続いてなぜそう思ったか理由を尋ねる。）。</li><li>⑩ 奥さまはご主人を○点と評価していますが、これはなぜ○点と評価しましたか。（2 番の協力者から、続いて点数が上がるためには何が必要ですかと尋ねた。）</li><li>⑪ 奥さまはご自分を○点と評価していますが、これはなぜ○点と評価しましたか。（2 番の協力者から、続いて点数が上がるためには何が必要ですかと尋ねた。）</li></ul> |
|--|

### 3. 分析の手続きと流れ

本研究では母親の語る内容に注目し、内容をカテゴリーに分類した。分析は以下の 2 つの段階をガイド項目ごとに行った。なお、分析の結果については指

導教員や同学の臨床心理学を専攻している修士課程一年の大学院生三名に、意見を求め、客観性の保持に努めた。

- 1) コード化：録音されたデータを逐語化し、協力者の発話を意味のまとまりに応じて切片化し、それぞれデータの特徴を表すような概念のラベルを記した。
- 2) カテゴリー化：次に、類似した概念のラベルをまとめて名前を付け、カテゴリーを作成した。二人目以降の協力者から、一人目で作成したカテゴリーにのっとして概念のラベルの説明を試み、必要に応じて新たなカテゴリーの生成や編集を行った。

#### 4. 倫理的配慮

質問紙にインタビューへの調査依頼文に参加は任意であること、個人情報の取り扱いについて厳守すること等を明記した。研究の趣旨に納得した場合に同意書に記入し、面接に参加した。発話は許可を得て録音され、逐語化された。本研究は、関西福祉科学大学倫理委員会の承認を得ている。

## 第 6 章 研究Ⅱ 結果

本研究では、母親の語る内容をガイド項目ごとに分け、カテゴリー化した。カテゴリー名は『』、ラベル名は「」で示している。なお、個人情報保護のため、下記の表中ではカテゴリー名とラベル名のみ記載している。

### 1. 子育て期における母親の育児・家事に対する大変さ

母親の育児・家事に対する大変さは、「子どものことを一部しか知らないのに夫が子どもを知った気になっている」ことや「夫が口うるさく意見を言う」といった『父親への不満』、「片づけに追われて自分の時間がない」という『子どもに対する不満』、子どもが病気や怪我をした時の「危機的状況への対処」が不安である、「すぐに助けてくれる人がいない」といった『環境面での不安・不満』、「自分の育児に自信がもてない」ことや「自分の将来に対しての不安」、「自分のことができない」こと、「自分以外の心配事が増える」といった『母親の不安・不満』、「子どもがテレビ・ビデオを見すぎる」こと、「子どもの健康に関すること」、「子どもの発達に関すること」、「同時に子どもの面倒をみる」ことや「子どものしつけに関すること」などといった『育児に対する不安・不満』、「子どもから目が離せず予定通りに家事を進められない」という『家事での苦労』があることが明らかになった。結果を表 12 に示す。

また『特に不安・不満がない』と答えた母親は「夫が・手伝ったり助けてくれる」ということや、「子どものやりたいことをやらせる」といった工夫や、「育児はこんなものと思っている」と育児を認識していることが明らかになった。

表12 育児・家事を行う母親が抱いている大変さにまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
子どものことを一部しか知らないのに夫が子どもを知った気になっている	父親への不満
夫が口うるさく意見を言う	
片づけに追われて自分の時間がない	子どもに対する不満
危機的状況への対処	環境面での不安・苦労
すぐに助けてくれる人がいない	
自分の育児に自信がもてない	母親の不安・不満
自分の将来に対しての不安	
感情的に子どもに接してしまう	
育児に疲れて家事に手が回らない	
自分のことができない	
自分以外の心配事が増える	
夜に眠れない	
子どもがテレビ・ビデオを見すぎる	育児に対する不安・不満
子どもの健康に関すること	
子どもの発達に関すること	
同時に子どもの面倒をみる	
子どものしつけに関すること	
子どもの食事に関すること	
トイレトレーニングに関すること	
子どもから目が離せず予定通りに家事を進められない	家事での苦労
夫が手伝ったり助けてくれる	特に不安・不満がない
子どものやりたいことをやらせる	
育児はこんなものと思っている	

## 2. 子育て期における母親の考える夫婦で育児・家事を行うために必要なこと

母親が考える夫婦で育児・家事を行うために必要なこととしては、夫婦両者が互いに働きかける『相互協力』や、母親に対する『夫からの働きかけ』、父親に対する『妻からの働きかけ』が必要であることが明らかになった。結果を表13に示す。『相互協力』とは、「互いの状態を察して手助けする」ことや、「互いにコミュニケーションをとる」こと、「互いに感謝を言葉にする」ことであった。『夫からの働きかけ』とは、「妻の疲れている状態を察して協力する」ことや、「休日に積極的に育児・家事に参加する姿勢」を持つこと、「育児や家事の大変さや大事さを理解する」ことであった。『夫への働きかけ』とは、「夫とコ

コミュニケーションをとる」ことや「言いたいことを我慢する」などといったことであった。

表13 夫婦で育児・家事を協力して行うために必要なことにまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
相互協力	互いの状態を察して手助けする
互いに感謝を言葉にする	
妻の疲れている状態を察して協力する	夫からの働きかけ
休日に積極的に育児・家事に参加する姿勢	
育児や家事の大変さや大事さを理解する	
夫とコミュニケーションをとる	夫への働きかけ
言いたいことを我慢する	
夫を煽てる	
育児・家事を分担しなければならない状況を作る	

### 3. 子育て期における母親がしてもらったら楽になる育児・家事

母親が父親に望んでいる育児・家事は、父親が子どもの相手をしている間に母親が家事を行うといった『一つの作業に専念できるように協力してくれる』こと、父親が朝の忙しい時間や母親が大変であると思っている作業を手伝うといった『忙しい時間や大変な作業を手伝ってくれる』こと、母親が自分のしたいことをできるように父親が育児・家事を行うといった『自分の時間を作ってくれる』こと、母親が苦手なことを父親が手伝ってくれるといった『不得意なことをしてくれる』こと、母親の状況を察して父親が別の育児・家事をすることや母親が体調の悪い時に父親が早く帰宅してくれるといった『妻に対して気遣いをしてくれる』ことであった。結果を表14に示す。

また、育児・家事全般を手伝って欲しいが父親が手伝わないのでイライラするためどこかに行って欲しいといった『夫が目の前にいないこと』も母親が望んでいることが明らかになった。

表14 父親にしてもらったら楽になる育児・家事にまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
時間の空いているときに子どもの相手をする	一つの作業に専念できるように協力してくれる
子どもの相手をする	
掃除や洗濯をする	
自分がしていることとは違うことを夫が手伝う	
子どもの着替え	忙しい時間や大変な作業を手伝ってくれる
自分がまだできていない家事をする	
子どもをお風呂に入れる	
皿洗い・夕飯作り・子どもをお風呂に入れる・子どもの相手	自分の時間を作ってくれる
料理	不得意なことをしてくれる
皿洗い	
自分に対しての気遣い	妻に対して気遣いをしてくれる
自分の調子が悪い時に手伝ってくれる	
夫が手伝わないのであれば遊びに行ってほしい	夫が目の前にいないこと

#### 4. 子育て期における母親が楽になったと考える現在父親がしている育児・家事

母親が楽になったと考える現在父親がしている育児・家事は、父親が子どもの相手をしている間にゆっくりとお風呂に入れるといった『ゆっくりできる時間を作ってくれる』こと、父親が子どもの寝かしつけや相手をする事で母親が他の育児・家事をできるといった『別の作業をさせてくれる』こと、『面倒なことをしてくれる』こと、『積極的に育児・家事に参加してくれている』こと、『子どもの相手をしてくれる』こと、母親がしてほしいと伝えたことを父親がしてくれるといった『頼んだことをしてくれている』こと、母親が疲れているときに育児・家事に参加するといった『疲れている時に手伝ってくれている』ことであると明らかになった。結果を表15に示す。

表15 父親にしてもらっていて楽になった育児・家事にまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
子どもをお風呂に入れる	ゆつくりできる時間を作ってくれる
自分が手が離せない時の子どものオムツ替え	別の作業をさせてくれる
自分が何かしているときに夫が別の家事・育児をする	
休日に子どもと遊ぶ	
子どもの相手をする	
片づけ	面倒なことをしてくれる
子どもの寝かしつけ・食器洗い	積極的に育児・家事に参加してくれている
夫が帰宅後に家事をする	
掃除・子どもをお風呂に入れる	
全般的な手伝い	
料理・子どもと遊ぶ	
子どもと遊ぶ	
買い物時に子どもの様子を見る	
自分が言ったことをする	頼んだことをしてくれる
食器洗い	疲れている時に手伝ってくれる

## 5. 夫婦間において育児・家事で気が合わないことや意見が衝突すること

夫婦間において育児・家事で気が合わないことや意見が衝突することとして、『夫婦間での考え方・性格の相違』があることや『夫の様子・態度に対して気になっていること』が明らかになった。『夫婦間での考え方・性格の相違』としては、「子どもの発達に対する考え方の違い」や「子どもに対する考え方の違い」などといったことがあった。『夫の様子・態度に対して気になっていること』としては、「夫が子どものことをわかっている気になっている」様子や「夫が子どもが出しているサインに気付かない」などといったことがあった。結果を表16に示す。

また、『夫と衝突しないための工夫』として母親が行っていることは、「相手に対しやりたいことの理由を説明する」ことであった。そして、父親が行っている『妻と衝突しないための態度』としては、「夫が意見や文句を言わない」ことであった。



表16 育児・家事で気が合わない事や衝突することにつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
子どもの発達に対する考え方の違い	夫婦間での考え方・性格の相違
子どもに対する考え方の違い	
子どものしつけに対する考え方の違い	
子どもとの接し方に対する考え方の違い	
夫が子どものことをわかっている気になっている	夫の様子・態度に対して気になっていること
夫が子どもが出しているサインに気付かない	
夫が言うことを聞いてくれない	
夫が小言を言う	
夫が細かいことを気にしない	
夫だけが自分の時間がある	
父親として夫に自分の考え方を持ってほしい	
相手に対しやりたいことの理由を説明する	夫と衝突しないための工夫
夫が意見や文句を言わない	妻と衝突しないための態度

## 6. 子育て期における母親が父親の仕事に対して思うこと

母親が父親の仕事に対して思うこととしては、「夫が帰宅時間を教えてくれない」ことや、「帰宅時間が不明瞭」であるため『生活リズムが合わない』ことや、「緊急事態への対応が不安」であったり、「夫と過ごせる時間がほしい」、「子どもと二人で寂しい」などといった『家にいる時間を増やしてほしい』と思っていることが明らかになった。結果を表17に示す。

また、「夫の仕事を応援している」、「夫の仕事に対してあまりなにも思わない」、「積極的に父親が育児・家事に参加してくれているためありがたい」と思っている母親は『夫の仕事に対しての不満は特に無い』ことが明らかになった。

表17 父親の仕事に対して思うことにつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
夫が帰宅時間を教えてくれない	生活リズムが合わない
帰宅時間が不明瞭	
緊急事態への対応が不安	家にいる時間を増やしてほしい
夫と過ごせる時間がほしい	
子どもと二人で寂しい	
育児・家事を手伝ってほしい	
夫の仕事を応援している	夫の仕事に対しての不満は特に無い
夫の仕事に対してあまりなにも思わない	
積極的に父親が育児・家事に参加してくれているためありがたい	

## 7. 父親が母親に対して気を遣っているかどうか

『夫が自分に気を遣っていない』と評価した母親は、「積極的に子どもや自分に関心を向けてほしい」という父親への要望や、「自分の求めている気遣いと異なる」、「夫が自分の家族ではなく親のことを優先的に考える」と思っていることが明らかになった。『夫が自分に気を遣っている』と評価した母親は、「夫が妻へ優しさを行動で表している」様子や、「夫が積極的に家事・育児に関心を向けている」こと、「子どもが生まれてからの夫の様子の変化」を評価していることが明らかになった。結果を表 18 に示す。

また、『夫が自分に気を遣っていない』と評価していても、「友達と話していて夫が育児をよくしてくれていると気付く」こともあることが明らかになった。

表18 父親が母親に気を遣っているかどうかに基づる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
積極的に子どもや自分に関心を向けてほしい	夫が自分に気を遣っていない
自分の求めている気遣いと異なる	
夫が自分の家族ではなく親のことを優先的に考える	
夫が妻へ優しさを行動で表している	夫が自分に気を遣っている
夫が積極的に家事・育児に関心を向けている	
子どもが生まれてからの夫の様子の変化	
友達と話していて夫が育児をよくしてくれていると気付く	

## 8. 父親が母親に対して理解しているかどうか

『夫は自分のことを理解している』と評価した母親は、「現在の自分の状態を夫が理解して協力してくれている」様子や、「子どもが体調不良の時に夫が仕事を早く切り上げたり休んでくれている」様子などを評価していることが明らかになった。『夫は自分のことを理解していない』と評価した母親は、「自分が言わなかったら夫が行動しない」、「言わないと夫が自分の様子に気づいてくれない」と思っていることが明らかになった。『夫は理解していないが理解しようとしてくれている』と評価した母親は、「意見を言ったら自分のことをわかろうとしてくれる」様子を評価していることが明らかになった。結果を表 19 に示す。

表19 父親が母親を理解しているかどうかに関わる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
現在の自分の状態を夫が理解して協力してくれている	夫は自分のことを理解している
子どもが体調不良の時に夫が仕事を早く切り上げたり休んでくれている	
自分の性格を夫が理解してくれている	
夫が自分のフォローしてくれている	
自分が言わなかったら夫が行動しない 言わないと夫が自分の様子に気づいてくれない	夫は自分のことを理解していない
意見を言ったら自分のことをわかろうとしてくれる	夫は理解していないが理解しようとしてくれている

## 9. 子育て期における母親が評価している父親の姿勢

母親が評価している父親の姿勢としては、『自分に対する夫の姿勢』、『育児に対する夫の姿勢』、『父親としての夫の姿勢』があることが明らかになった。結果を表 20 に示す。『自分に対する夫の姿勢』としては、「不満を伝えたら改善してくれる」ことや、「自分の状態を察して協力してくれる」こと、「不満や文句を言わない」ことなどがあることが明らかになった。『育児に対する夫の姿勢』としては、「子どもに自分のできないことをしてくれている」ことや、「子どもを可愛がっている」、「帰宅後も積極的に育児をしてくれている」様子などがあることが明らかになった。『父親としての夫の姿勢』としては、「父親としての自覚がない」ことや、「経済状況を理解していない」様子があることが明らかになった。そして父親への評価には、「父親として成長してほしい」といった、『夫への期待』もあることが明らかになった。

また、『今以上に夫に求められていること』としては、「妻のする育児をみて覚える」こと、「帰宅後に家事を手伝う」こと、「恩着せがましくなく家事をする」ことなどが求められていることが明らかになった。

表20 母親が評価した父親の姿勢にまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
不満を伝えたら改善してくれる	自分に対する夫の姿勢
自分の状態を察して協力してくれる	
不満や文句を言わない	
育児はしているが自分の希望には添えていない	
主婦は家事をするものだと思っている	
子どもに自分のできないことをしてくれている	育児に対する夫の姿勢
子どもを可愛がっている	
帰宅後も積極的に育児をしてくれている	
夫が自分のことをしながら子どもの相手をする	
子どもの出すサインに気付かない	
父親としての自覚がない	父親としての夫の姿勢
経済状況を理解していない	
父親として成長してほしい	夫への期待
妻のする育児をみて覚える	今以上に夫に求められていること
帰宅後に家事を手伝う	
恩着せがましくなく家事をする	
子どものことを一番に考える	
積極的に育児に参加してくれるようになる	
休みの日に家族で出かける	
理想の将来像へ向けた父親になる	

## 10.子育て期における母親が評価している自分の姿勢

母親が評価している自分の姿勢としては『育児に対する自分の姿勢』や、『母親としての自分の姿勢』があることが明らかになった。結果を表 21 に示す。『育児に対する自分の姿勢』としては、「子どもに対して感情的になってしまう」ことや、「子どもにしてあげられることをできていない」様子などがあることが明らかになった。『母親としての自分の姿勢』としては、「子どもの悪いところは自分のせいだと思う」ことや、「育児や母親としての自分に自信がもてない」こと、「母親像が確立していない」ということが明らかになった。そして母親としての満足感には、「母親として成長したい」という『自分自身への期待』が含まれていることや、「子どもと一緒にいるのが嬉しい・楽しい」などといった、『子どもや育児に対する肯定的な感情』。「のんびりと育児ができています」といった『現在の生活への満足感』。「子どもがご機嫌で一緒にいてくれる」といった、『子どもが母親へ与える影響』。「周囲の人が子どもの存在を喜んでくれている」といった、『周囲からの称賛』が関係していることが明らかになった。

また、『自分に対して今以上に求めるもの』としては、「子どもの楽しそうな様子を見る」こと、「子どもへの投資額を増やせるようになる」こと、「生活リズムを子どもに合わせるようになる」ことなどを求めていることが明らかにな

った。

表21 母親としてどの程度満足しているかに関して評価した母親自身の姿勢にまつわる母親の語りの分類

ラベル名	カテゴリー名
子どもに対して感情的になってしまう	育児に対する自分の姿勢
子どもにしてあげられることをできていない	
子どもの出すサインに気付けなかった	
子どもの前で夫婦喧嘩をする	
子どもの悪いところは自分のせいだと思う	母親としての自分の姿勢
育児や母親としての自分に自信がもてない	
母親像が確立していない	
母親として成長したい	自分自身への期待
子どもと一緒にいるのが嬉しい・楽しい	子どもや育児に対する肯定的な感情
子どもが面白いし可愛い	
のんびりと育児ができています	現在の生活への満足感
子どもがご機嫌で一緒にいてくれる	子どもが母親へ与える影響
周囲の人が子どもの存在を喜んでくれている	周囲からの称賛
子どもの楽しそうな様子を見る	自分に対して今以上に求めるもの
子どもへの投資額を増やせるようになる	
生活リズムを子どもに合わせるようになる	
感情のコントロールができるようになる	
子どものことを考える母親になる	
子どもを一生フォローできる母親になる	
母親として意思を突き通す覚悟を持つ	
自分のやりたいことと育児を両立させる	
育児の勉強をする	
ママ友と情報交換や相談をする	
安心できる人に子どもをみてもらう	
育児に工夫を凝らす	

## 第 7 章 研究Ⅱ 考察

研究Ⅱの目的は母親が評価している父親像や育児・家事への不安を具体的に明らかにし母親のニーズを理解することで母親や父親の育児支援に役立つ方略を考えることであった。本研究の結果から述べられることは以下の通りである。

### 1. 育児・家事を行う母親が抱いている大変さ

母親の育児・家事に対する大変さは、夫が子どもと普段接していないのにかかっている気になっていたり、夫が口うるさく意見を言う『父親への不満』があることが明らかになった。このことから母親は父親より普段子どもとより接している自分の方が子どものことを理解しているため、夫が自分よりも子どもを理解しているということや子どものことで意見を言われることに不満を抱いている様子がうかがえた。また、子どもが部屋を散らかすのでいつまでも片付けができないという『子どもに対する不満』があることや、「育児に疲れて家事に手が回らない」、「同時に子どもの面倒をみる」ことや子どもの夜泣きによって「夜に寝れない」という回答が示す通り、子どもの育児に日々追われている母親は自分のことをする時間がないということに大変さを感じている様子がうかがえる。

そして、「危機的状況への対処」が不安であるといった『環境面での不安・苦勞』や「自分の育児に自信がもてない」ことなどの『母親の不安・不満』。「子どもがテレビ・ビデオを見すぎる」こと、「子どもの健康に関すること」、「子どもの発達に関すること」といった『子どもに対する不安・不満』を抱いていることが明らかになった。このことから母親は自分が子育てを上手にできるかどうか、子どもを健康に育てることができるかどうか不安を抱きながら育児を行っていることが考えられる。

### 2. 夫婦で育児・家事を協力して行うために必要な姿勢

夫婦で育児・家事を協力して行うために必要なことは夫婦両者が互いに働きかける『相互協力』が必要であることが明らかになった。このことから普段から互いの様子を観察し合い、状況によって協力をし合うことが大切であると考えられる。そしてそのためには「妻の疲れている状態を察して協力する」などの『夫からの働きかけ』や「夫とコミュニケーションをとる」など『夫への働きかけ』が必要であると考えられる。

### 3. 母親が望んでいる父親にしてほしい育児・家事

母親が父親に望んでいる育児・家事は、『一つの作業に専念できるように協力してくれる』ことや、『忙しい時間や大変な作業を手伝ってくれる』ことなどから、父親が協力を望まれている育児・家事は、妻が家事をしているときに、子

どもの相手をすることや、朝の忙しい時間帯や母親が手間取っていきそうな作業を手伝うことと考えられる。また母親自身としては、父親に『自分の時間を作ってくれる』、『不得意なことをしてくれる』、『妻に対して気遣いをしてくれる』などの働きを望んでいることが示唆された。

#### 4. 母親が助かったと感じている父親が行っている育児・家事

母親が助かったと感じる、父親がしてくれる育児・家事は、『ゆっくりできる時間を作ってくれる』ことであった。これは父親が、『積極的に育児・家事に参加してくれている』ことで、母親が子育てを忘れてリラックスできるような時間を提供できたことで母親が楽になったと感じていると考えられる。また、『別の作業をさせてくれる』ことや『面倒なことをしてくれる』ということは、母親が望んでいる父親にしてほしいことであった『一つの作業に専念できるように協力してくれる』ことや『不得意なことをしてくれる』ことを父親が行っているため母親が助かったと感じていると考えられる。そして、『頼んだことをしてくれる』ことで母親が助かったと感じていることから、育児・家事でなにをしてよいかわからない父親は、母親に対し自分が何をすればよいか聞いてみて手伝うことが母親を助けるうえで大切であると考えられる。また、この姿勢を積み重ねていくことは母親が父親に対して『積極的に育児・家事に参加してくれている』と感じさせるために必要であると推察される。

#### 5. 夫婦間における育児・家事で気が合わないことや衝突すること

夫婦で育児・家事を行っていて、『夫婦間での考え方・性格の相違』や、『夫の様子・態度に対して気になっていること』があるということが明らかになった。夫婦間で特に衝突はないと回答した母親が工夫していることとして「相手に対しやりたいことの理由を説明する」ことや「夫が意見や文句を言わない」ことが語られた。このことから母親は父親に対して自分の考えを説明してわかってもらう姿勢や、父親は母親に対して言いたいことや文句があってもぐっと堪える姿勢を持つことで、衝突が回避できる場面が増えると考えられる。

#### 6. 父親の仕事について母親が思うこと

父親の仕事について母親は、父親の帰宅時間がわからず、「予定が立てにくい」、『生活リズムが合わない』、と思っていることが明らかになった。このことから母親が子どもや父親に合わせて育児・家事を行う上で、父親の帰宅時間がわからないため苦労していることが示唆された。また、『家にいる時間を増やしてほしい』、「緊急事態への対応が不安」であるという回答例があったことから、父親が仕事に出て家に母親と子どもが二人きりでいるという環境に心細さを感じている母親もいることが推察された。このことから、母親は父親が仕事に出ている間、「緊急事態への対応が不安」であることや、子どもと二人きりでいる心細さを感じながら、育児・家事を行っている様子が示唆された。

## 7. 母親への気遣いに必要なこと

『夫が自分に気を遣っていない』と感じている母親の中には「積極的に子どもや自分に関心を向けてほしい」という父親への要望があることが明らかになった。『夫が自分に気を遣っている』と感じている母親が、「夫が妻へ優しさを行動で表している」様子や、「夫が積極的に家事・育児に関心を向けている」ことを評価していることから、母親や子どもに対する父親の積極的な関心が気遣いに必要なことであると考えられる。また、「夫が自分の家族ではなく親のことを優先的に考える」姿勢を評価していることから、母親は父親として、自分の家族のことを一番に考えていてほしいと望んでいることが考えられる。

## 8. 母親を理解するために必要なこと

『夫は自分のことを理解している』と感じている母親は、「現在の自分の状態を夫が理解して協力してくれている」様子や、「自分の性格を夫が理解してくれている」という母親に対しての姿勢と、「子どもが体調不良の時に夫が仕事を早く切り上げたり休んでくれている」ことや、「夫が自分のフォローをしてくれている」という育児に対する姿勢を評価していること。そして、『夫は自分のことを理解していない』と評価している母親は、「自分が言わなかったら夫が行動しない」ことや、「言わないと夫が自分の様子に気づいてくれない」と感じていることから、父親は母親や子どもに関心を向け、母親の状態や性格を考え、積極的に育児・家事に参加する姿勢が望まれていることが示唆された。

## 9. 母親が評価している父親の姿勢

母親が評価している父親の姿勢としては、『自分に対する夫の姿勢』、『育児に対する夫の姿勢』、『父親としての夫の姿勢』があることが明らかになった。『自分に対する夫の姿勢』として、「育児はしているが自分の希望には添えていない」と感じていることから、母親は父親が状況によって母親のニーズを理解し、「自分の状態を察して協力してくれる」ことや「不満を伝えたら改善してくれる」姿勢を望んでいることが考えられる。『育児に対する夫の姿勢』として、父親の「帰宅後も積極的に育児をしてくれている」様子や、「子どもに自分のできないことをしてくれている」様子を評価していることから、母親は、父親に帰宅後も少しでも育児に関わってほしい、自分のできないことをしてほしいと思っていることが示唆された。

## 10. 母親が評価している母親としての満足感と関係する自分自身の姿勢

母親が評価している母親としての満足感と関係する自分自身の姿勢は、『育児に対する自分の姿勢』や『母親としての自分の姿勢』があることが明らかになった。「子どもに対して感情的になってしまう」ことや、「子どもにしてあげられることをできていない」こと。「子どもの悪いところは自分のせいだと思う」



ことや、「育児や母親としての自分に自信がもてない」ことなど、自分自身の悪い面や、ネガティブな面に関しての語りが多かったことから、母親は育児をする上で、子どもに余裕を持って接することができない現状や、自分がしている育児はこれでよいのであろうかといった不安を抱えている様子がうかがえる。そのために父親ができることとして、「子どもと一緒にいるのが嬉しい・楽しい」などといった「子どもや育児に対する肯定的な感情」をもってもらうため、育児や家事を手伝い、母親の負担を減らすことで、母親に余裕が生まれることが考えられる。

## 第8章 本研究のまとめと今後の課題

本研究の目的は、育児ストレスと関連する母親の要因をより詳しく明らかにすることにより、母親の育児ストレスを軽減させるための方策を検討するために、母親の育児ストレスに影響を及ぼす要因を検討すること、そのメカニズムを解明することであった。また、母親が評価している父親像や育児・家事への不安を具体的に明らかにし母親のニーズを理解することで母親や父親の育児支援に役立つ方略を考えることであった。

そのため、研究Ⅰでは父親の育児家事行動が母親の育児ストレスに影響するプロセスにおいて、その他の母親の心理的要因を媒介変数として影響しているということを仮定し、父親の育児・家事行動と母親の育児ストレス間の因果構造を調べるために探索的に共分散構造分析を行った。その結果、「育児家事満足度」が「父親の得点」に影響をし、「父親の得点」が「母親としての満足度」と「夫婦関係満足度」に影響をし、「夫婦関係満足度」が「主観的幸福感（失望感）」に影響をし、「主観的幸福感（失望感）」が「育児ストレス（母親関連）」に影響をし、「育児ストレス（母親関連）」が「母親としての満足度」と「育児ストレス（子ども関連）」に影響をするというモデルが支持された。

研究Ⅱでは、実際に育児・家事を行っている母親に対しインタビュー調査を行った。その結果、子育て期における母親の大変さは、「危機的状況への対処」が不安であるといった『環境面での不安・不満』や「自分の育児に自信がもてない」ことなどの『母親の不安・不満』、「子どもの健康に関すること」などの『育児に対する不安・不満』を抱えていることが明らかとなった。また、母親の評価する父親の姿勢は、『自分に対する夫の姿勢』、『育児に対する夫の姿勢』、『父親としての夫の姿勢』であることが明らかとなった。そして、母親が評価している自分の姿勢は、『育児に対する自分の姿勢』や、『母親としての自分の姿勢』があることが明らかになった。

これらの結果から、父親は母親や子どもに対して関心を持ち、積極的に育児・家事を協力する姿勢を示すことで「父親得点」が上昇すること、母親の負担が減少すると、母親に余裕が生まれ、「母親としての満足感」が上昇すること、母親が育児・家事を協力できるパートナーとして父親を頼れると「夫婦関係満足度」も上昇することが明らかにされた。父親が母親の負担を軽減することで、母親は自分の時間も増えるので、「主観的な失望感」が減少し、育児ストレスが軽減することが示された。

本研究から提言できるとすれば、社会的に望まれることは、母親が子どもを安心して預けられる場所を増やし、母親が利用しやすくなることで、母親が自分のために使える時間を増やせられるような施設や環境を作ることが望まれる。また、子育て広場のような育児の不安や大変さを共有することができるママ友との繋がりが持てる場所を利用するように、積極的に親に呼び掛けることも重要であると考えられる。

田中（2010）は、母親の育児ストレスの軽減には実際の育児家事行動ではなく母親が父親の育児家事行動を好意的に受け止め満足感をもつことと深く関連していると述べているが、今回の結果では父親の育児家事行動に対する満足度は、父親の得点と夫婦関係満足度、主観的幸福感（失望感）を媒介して育児ストレスに影響を与えていた。このことにより、父親は、母親の行う育児・家事を協力したり、気遣いなどの優しさを向けることにより、母親の負担を減らし、母親が少しでも自分らしく生きることができるサポートをしていく必要性が確かめられた。

今後の研究課題として、本研究では対象を母親に限定して行ったが、夫婦で協力して育児・家事を行っていくためには、夫婦間での育児・家事に対する考え方の違いなど、双方の関連性や認識のずれを明らかにするような研究が望まれる。

#### 謝辞

本論文の執筆に当たり、日々ご指導いただいております関西福祉科学大学・谷向みつえ先生、鎌田次郎先生、亀島信也先生に厚く御礼申し上げます。

そして、統計処理についてご指導くださいました関西福祉科学大学・多田美香里先生、宇恵弘先生、冶部哲也先生に御礼申し上げます。

また、本研究にご協力くださった施設の方々に深く感謝致します。

さらに、本研究の趣旨にご理解をいただき、お時間を割いて調査にご協力いただいた対象者の皆様に、重ねて感謝の意を表したいと思います。

#### 引用文献

- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至（2003） 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 第 74 巻, 第 3 号, 276-281
- 柏木恵子・若松素子（1994） 「親になる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子（2010） 家族心理学への招待 第 2 版 ミネルヴァ書房 1 現代日本の家族, 1-7
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘（1996） 子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児を持つ家族について 発達心理学研究, 第 7 巻, 1 号, 31-40
- 鎌田次郎・糸魚川直裕・南徹弘・金沢忠博・日野林俊彦・安田純・橘英彌・島田有規・江田裕介・藤村正哲（2000） 超低出生体重児の学齢期における心理・行動-その 34.父親の家事・育児分担の子どもの特性・親の養育態度との関係 - 日本心理学会第 64 回大会発表論文集, 1060
- 我部山キヨ子（2002） 産後の育児に関する研究—育児適応を促進・遅延する因子— 母性衛生 43, 149 - 152
- 北原保雄編（2002） 明鏡国語辞典 大修館書店
- 厚生労働省（2012） 平成 23 年度 雇用均等基本調査(確報)  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-23r-08.pdf>
- 国立社会保障・人口問題研究所（2010） 第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関わる全国調査 夫婦調査の結果概要 <http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/doukou14.pdf>
- 国立社会保障・人口問題研究所（2011） 第 4 回全国家庭動向調査(2008 年社会保障・人口問題基本調査) 現代日本の家族変動  
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/206710.pdf>
- 小西秀代（2004） 現代の父親の育児参加意欲に関する要因 0 歳児の育児指導に対するニーズ 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録, 29, 212-219
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則（1994） 育児ストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 64, 409-416
- 鈴木淳子（1994） 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成 心理学研究, 65, 34-41
- 田中恵子（2010） 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連 人間文化研究科年報, 25, 125-134
- 徳田克己・水野智美（2001） 父親の家事協力・育児参加と夫婦げんかの関係 I 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 44
- 内閣府（2010） 仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章  
<http://www.cao.go.jp/wlb/government/pdf/charter.pdf>
- 内閣府（2013） 平成 24 年版 子ども・子育て白書  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/whitepaper/w-2012/24pdfhonpen/pdf/1-2->

- 服部祥子・原田正文（1990） 乳幼児の心身発達と環境—大阪レポート— 名古屋大学出版
- 平山順子（1999） 家族を「ケア」ということ—育児期女性の感情・意識を中心に— 家族心理学研究, 13(1), 29-47
- 平山順子（2002） 子育て臨床の理論と実際 【各論】 夫婦関係の研究が示す「新しい子育て」への提言 日本家族心理学会(編), 63-76
- 福丸由佳, 無籐隆, 飯長喜一郎（1999） 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連 発達心理学研究, 第10巻, 第3号, 189-198
- 福丸由佳（2003） 乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割 風間書房, 45-64
- 牧野カツコ（1982） 乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞ 家庭教育研究所紀要, 3, 24-56
- 牧野カツコ（1983） 働く母親と育児不安 家庭教育研究所紀要, 4, 67-76
- 三上知美・掛谷益子（2011） 母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究 インターナショナル nursing care research 10(1), 75-83
- 諸井克美（1996） 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10(1), 15-30